屋根も窓も壊された国立カブール博物館（５月）

開かれた大学。3

アフガニスタン文化財復興支援「アフガニスタン―悠久の歴史展」をめぐって

竹内　順一

世界中の人々に衝撃を与えた、タリバン政権によるバーミヤンの巨大石仏破壊の衝撃的映像。皮肉にも「破壊」によって脚光を浴びることになったアフガニスタンの至宝が、大学美術館でまもなく公開される。

人の手による文化財破壊

今夏に開催する「アフガニスタン―悠久の歴史展」の準備のため、アフガニスタンを訪れた。

そこで、国立カブール博物館の現在の姿を見た。

一九八九年のソ連軍撤退後の内戦やそのタリバン政権下の強固な偶像崇拝禁止策のために、多くの文化財が破壊された。とくに昨年三月砲弾によってバーミヤンの巨大石仏が崩壊された様子は、テレビ映像によって世界中に配信され、世界中の人々に衝撃を与えた。

そもそも古代から連綿と続く古文化財は、人為的な力が加わらなくとも、自然に「破壊」されるものである。

野外にある石仏や建造物などは、風雪に耐えて今日にまで存続するが、それとても一年一年、いや一日一日と風化しているはずである。幸い博物館に保管されている文化財であっても、物質上は同じように退化している。いわゆる「経年変化」である。石や磁器といった堅牢なものは、その退化をまぬがれようが、紙や布、あるいは木でできた文化財は、私たちの眼に見えないとしても、厳密には、少しずつ完成時から退化している。

かつて金沢工業大学で、紙の保存に関する国際シンポジウムが開かれ、「和紙」の優れた特質、すなわち経年変化に耐える力があることが議論された。その折、何がもっとも文化財を破壊するか、という話題になった。出席者一同は、酸性雨でも公害に汚染された空気でもなく、「人の手」による破壊がもっとも多いという結論に達した。

国立カブール博物館は、戦争による破壊である。なかに展示・保管されていた文化財は、四散してしまった。まさに人の手によって壊されたのである。この博物館は王宮

フランス国立ギメ東洋美術館における「アフガニスタン―悠久の歴史展」の会場風景（3月）

（これも砲弾によって廃墟となっている）の前に位置して、世界中の人々から愛された美しい建物であった。幸い破壊をまぬがれた数少ない文化財（彫刻や壁画）の一部が、大学美術館へ特別出品される予定である。

今春、パリのフランス国立ギメ東洋美術館で「アフガニスタン―悠久の歴史展」が開かれ、好評のうちに五月下旬に終了した。それが芸大美術館に巡回する。

折しも本年は「国連文化遺産年」という文化財保護のキャンペーンの年にあたる。文化の保護の意味をあらためて考える機会としたい。

（たけうち・じゅんいち／大学美術館長）

展示作品の一部

アフガニスタン文化財復興支援「アフガニスタン―悠久の歴史展」は、7月16日（火）から9月16日（月）まで大学美術館で開催される